◆ キーワード　うわさ／地域／異形性／権力／伝説

地下に隠された文字と伝承
―羊太夫伝説の世界―

佐藤　喜久一郎

はじめに

本論文では群馬県地域に伝承される羊太夫伝説を取り上げ、①歴史実践をめぐる政治と宗教の力学、②文字文化と口承文化の関係性、③流言飛語のメカニズム、④伝統主義と近代主義の対立について論じる。

羊太夫伝説は北関東ではもっとも著名な民間伝承のひとつであり、多胡碑（ユネスコ世界の記憶に指定）にまつわる歴史物語として広く知られている。羊太夫は古代の「上野國」を治めていたとされる英雄で、多胡碑も近代以前までは「羊太夫の墓」として祭祀の対象になっていた。群馬県下には今なお、彼を祭神とする神社がいくつかあるが、近代化以前には多胡碑の境内地にも祭祀施設が存在したのである。

ただし、地域史の一般常識に従えば、和銅四年（七一一）の多胡郡創設を記念して建てられたのが多胡碑であるとされ、そこに刻まれているのは以下の文言である。

弁官符上野國片罡郡緑野郡甘
良郡并三郡内三百戸郡成給羊
成多胡郡和銅四年三月九日甲寅
宣左中弁正五位下多治比真人
太政官二品穂積親王左太臣正二
位石上尊右太臣正二位藤原尊

一読すれば分かるように、建郡を命じる国からの指令が記され、関わった役人たちの名が列挙されている。どこにも羊太夫の名は見えないが、二行目に「給羊」なる文言があることから、これまで羊太夫伝説との関係が指摘されてきた。「羊」なる渡来系の人物が多胡郡を治めていた証拠だと考えている人も多い。

しかしここで注意したいのは、伝承されてきた羊太夫伝説の内容である。それらの多くが石碑の文言に囚われない自由な内

容を持つことが重要だ。かつての在地社会には無筆の民衆が多く存在したと思われる。そうした人々がどのような文脈から多胡碑を祀っていたか考察すると、民俗学研究の視座からは非常に意義深い。口頭伝承への注目により、当該地域における文化、宗教の意外な本質が見えてくる。豊かな伝承世界の内容は、必ずしも古代史的事実には還元できないのである。

1、羊太夫伝説の世界

(1)羊太夫伝説の時代的変化

現在、群馬県下に住む多くの人々は、多胡碑とは古代の渡来文化の象徴であり、「羊」はその文化の指導者だったと信じている。ところが在地の古文書や縁起書などを繙けば、近代以前の羊太夫像が現代のものとは程遠い内容だったことが分かる。

ここで本伝説の時代的変化をごく簡単に振り返ってみると、室町時代、江戸時代、近現代と、それぞれの時代で大きな違いがみられる。早い時代のものはごく単純な内容だが、現代に近づくにつれ、羊太夫は次第に偉大な歴史的人物とみなされるようになる。それとともに物語の筋も徐々に複雑化してくるのである。

例えば、室町時代に編纂された『神道集』の場合、羊太夫は「上野國勢多郡鎮守赤城大明神事（本論文では赤城大明神事と略す。以下同じ）」という物語に「河ヨリ西七郡ノ内ニ聞ヘタル足早」として登場する。西上州に名高い脚力を見込まれ、都への使者の役を務めたと語られるが、その地位は他の有力な神々に比べ低い。羊太夫は上野国の領主たちに使役される存在にすぎず、本地も示されず、その来歴すら分からないのである。

ところが、近世の民衆に人気を博した『小幡羊太夫縁起』[1]などの物語では、主人公の羊太夫が一貫して悲劇の武将として描かれている。

上野国多胡郡の領主である「小幡羊太夫宗勝」は知勇兼備の名将であり、八束小脛なる童子を連れ、名馬に乗って日々都に通っていた。ところがあるとき、羊太夫は好奇心に負けて小脛の羽を引き抜いてしまう。すると主従ふたりはたちまちその早足の力を失ったばかりか、恐ろしい災厄の渦に巻き込まれる。朝廷に参内しないのが仇となり、讒言を信じた帝が討伐の兵を送ってきたのである。こうして全国から「官軍」が上野国に押し寄せてくるのだが、羊太夫はこれを正面から迎え撃ち、散々に打ち負かし、最後まで勇敢に戦って死んだとされる。そして、この羊太夫の墓が池村にある石碑（多胡碑のこと）だと伝えられている。

この奇妙なフィクションが人々に支持された理由は後に詳しく述べるが、近現代になるとこうしたお話の享受者は徐々に減り、羊太夫の存在もナショナルヒストリーへと包摂されていく。歴史教育と多胡碑の研究の進展がそれを促した感がある。しかし、一連の伝説は近代化のために消え失せるどころか、二〇世

紀には装いを新たに生まれ変わる。このころ古代史の知識が大衆化したことによって、その内容を踏まえた新たなフェイクロアが創られたのである。

特に注目すべきは、群馬県の郷土史界の中心人物だった豊国覚堂が、大正三年に『多胡碑集説』という書物のなかで「羊」＝渡来人説を述べたことである。これをきっかけに一連の「学説」が「歴史」として地域に定着することになった。筆者はかつて論文「多胡碑と渡来人のフェイクロア―郷土史をめぐる文化政治学―」[2]において、豊国ら郷土史家たちの運動が渡来人説を地域に根付かせ「郷土史」を創り出した過程を明らかにしたが、その背景には多胡碑の位置付けをめぐる中央の学者との意見対立があった。「羊」の実在を信じる郷土史家たちは、アカデミズムからの批判を徹底的に封じ込めるため、多様なメディアを動員し県民に向け自説の正しさをアピールしたのである。

ようするに現代の羊太夫伝説は郷土史家の政治的工作で創られたものであり、その十全の意味においてフェイクロアなのだ。しかしこのとき編まれた『郷土読本』や地誌類は後世の人々に強い影響を与え続けた。特に青年時代にそれらを通して「郷土史」を学んだ高齢者の間では、羊太夫を郷土の偉人とみなす傾向が強い。群馬県地域においては、「羊太夫は日本人に大陸の進んだ技術を教えた」などと、受け売りの知識をさも伝説のように語る話者がいるが、そうした態度は人々が「郷土史」を共有する社会に特有のものなのである。

(2) 権力の恐怖と羊太夫の異形性

羊太夫伝説は中世神話からフェイクロアまで変化の幅が広いばかりか、現在語られる物語の内容もバリエーションに富んでいる。また語り手それぞれの教養に基づく理解の差もあり、伝説に対する人々の解釈はまちまちである。

しかし、そうした様々な差異を超えて、羊太夫伝説には全時代に共通する一貫したテーマがある。おそらく誰もが気づくことだが、羊太夫が登場する物語では、決まって国と地方の権力関係をめぐりストーリーが展開することに注目したい。必ず大規模な争いごとが起こり、その引き金となるのは常に羊太夫なのである。

羊太夫が物語に初めて登場するのは『神道集』の「赤城大明神事」だが、これは上野国司高野辺家の崩壊を描く悲劇である。物語は継子いじめのフォークロアを下敷きにしたものでありながらも、最後は上野国全土を巻き込む大規模な事件に発展する。端役ながらそこで重要な役回りを演じるのが羊太夫である。

履中天皇の時代、高野辺大将家成の家では、他国から嫁いで来た後妻が権勢を振るうようになり、邪魔な家臣や先妻の娘たちを殺害するなど、極めて思いの儘に振る舞っていた。しかし伊香保太夫をはじめとする上野国の領主たちは、自分たちの力だけでは対抗することが叶わなかったのである。そこで都にいる国司の子息の中納言に助けを求めるのだが、このとき伊香保

太夫の命を受けて使者の大任を果たすのが、足早で知られる羊太夫であった。彼からの情報で危機を知らされた中納言は国々の軍勢を引き連れて急ぎ上野国に下向する。そしてたちどころに継母たちを逮捕し、殺された妹たちの復讐をなしとげるのである。

しかし、この物語にあえて羊太夫を登場させる意味はあるのだろうか。使者は別に彼以外の人物であってもかまわないのである。にもかかわらず、「河ヨリ西七郡ノ内ニ聞ヘタル足早」として活躍の場を与えたことを考えると、『神道集』が編纂された一四世紀の段階において、羊太夫伝説はすでに上野国において広く知られていたのだろう。あまりにも唐突に現れるので現代の読者は当惑するが、中世人にとってみると、都への使者は羊太夫を措いて他にはなかったのだ。

ここでは羊太夫が地方と中央を結ぶ人物として描かれることがポイントである。彼の報告の結果、帝の命令で大きな軍勢が集まり上野国に向け進撃するのである。これは近世の『小幡羊太夫縁起』にもその名残をとどめる要素と思われる。羊太夫は地方に何か劇的な変化をもたらす存在なのである。

しかし『小幡羊太夫縁起』では逆に羊太夫の不参が朝廷を刺激し、国家権力はなぜかその敵対性を露わにする。羊太夫が朝廷への日参を怠ったことが咎められ、讒言によって日本中の兵が攻め寄せてくるのだった。

このように「赤城大明神事」と『小幡羊太夫縁起』を比べてみると、ふたつの「官軍」[3]はそれぞれ全く対蹠的に描かれている。前者におけるそれは悪政にあえぐ上野国を救うためにやってくるが、後者ではほとんど侵略者と変わらない。数年間連絡を絶っただけで疑われ、謀反人として殺されるという筋書きにはリアリティがないけれども、地方の人々がそれだけ中央の権力を畏怖していたことが分かる。

こうした「官軍」像は国家や天皇に対する地方民衆のアンヴィバレンツな感情の反映ではないのか。それは悪しき地域権力からの解放者であるいっぽう、恐怖に満ちた権力悪の象徴でもあるのだ。羊太夫はその犠牲者のシンボルなのである。

しかし、『小幡羊太夫縁起』以降の羊太夫には、魔物、または怪物としての要素も色濃く伺えるので注意が必要である。羊太夫は必ずしも民衆から敬われるだけの存在ではなく、彼らから忌避される要素も持っていた。この物語の後半では「官軍」による羊太夫調伏が語られるが、その内容はあたかも修験による妖怪退治のような筋書きになっているのである。

「官軍」は羊太夫の軍勢を壊滅させてみたものの、羊太夫たちは鳶などに姿を変え池村（多胡碑のある場所）方面に逃げるので手を焼き、神仏の力に縋ることになる。「官軍」の大将は不動明王の社に篭って怨敵退散を祈願するが、果たして七日目の晩に不動が示現し、羊太夫調伏の法を授けられる。「官軍」の大将がその教えに従うと、ついに羊太夫は観念したらしく、池村から自害した姿で発見されたという。

このように、近世の『小幡羊太夫縁起』では、羊太夫を悲劇の英雄として描く反面、神秘性や恐怖の側面を描くのも忘れない。ところが近代の郷土史家たちは、「金属精錬に長けた羊太夫が日本人に大陸の先進技術を教えた」などと主張して、羊太夫を群馬の文化英雄に祭り上げてしまった。かなり偏った理解だったのではないか。

実は、近代以前の羊太夫信仰には御霊慰撫の要素が強かった。縁起の内容から判断すると、祭祀には修験が深く関与していたとみて間違いないが、池村には明治十一年前後まで修験の子孫が多胡碑に隣接して住み、「代々多胡碑の監視」をしていたとされる。じじつ地方文書などで確認してみると、多胡碑についてはその霊験とともに神罰の噂が絶えず、近代化以前まで現地ではかなり恐れられていたことがわかる。粗末に扱えば必ず疫病が流行ったとも言われており、[4]そのため修験の呪術的力能が求められたに違いない。

羊太夫伝説においては、権力への恐怖と土俗への恐怖が交錯する。怪しげな風説が常に流れるのもそのためだろう。陰謀論めいた噂がいくつもあるが、それらを大きく二つに分類すると、ひとつは権力の陰謀、もうひとつは信仰上の秘密に関わるものである。

前者においては、何者かが多胡碑から重要な文を削り取って羊太夫の存在を抹殺したなどと説かれ、[5]後者においては、羊太夫がキリシタンとつながっていたとか、多胡碑の秘密を今も隠し続ける人間がいるなどと語られる。そのうち特に有名なものは、多胡碑の地下埋蔵物についての噂と、隠された秘密の文字をめぐる様々な俗信である。

こうした逸話は、奇談として多くの研究者に知られながらも、これまでほとんど学術的な議論の対象となったことはない。いかがわしい話だと敬遠されているのである。しかし、羊太夫伝説流布の原因が権力や呪術への恐れにあるとしたら、こうした噂のなかにこそ物語の本質が表れるのではないか。筆者は一連の陰謀論が必ずしも事実の反映だとは思わないが、民俗学の研究対象としてはきわめて重要だと信ずるのである。

2、隠された文字の秘密

(1)禁忌とされた地下の文字

多胡碑の境内地は近代になって何度も整備された。こうした工事は、羊太夫を尊崇する地元民にとって印象の深い出来事だったらしく、それにまつわる伝説が多く語られている。なかでも特に大きな事件として人々の記憶に残るのは、明治十一年前後に行われた最初の公園建設工事と、第二次世界大戦後の混乱のなか行われた文化財秘匿のための工事である。

前者は県令楫取素彦からの指示に基づき「古跡」保護の観点から行われたもので、境内地の全体的景観を一新させる大事業だったとされる。木や花を植え、美しい碑亭を建て、詩歌を刻

んだ額などを飾るなど、多胡碑の価値に相応しい文化的公園の建設が目指された。しかしこの事業は明治十三年ころ「事故」のため望み半ばで中断したと言われており、開園記念碑と碑亭は完成させることができなかったようである。[6]

しかし、明治十二年の段階ですでに第一次築園工事は完了しており、かつての宗教的景観は大きく変貌したと考えらえる。そのためなのだろうか、地元の保守層から県令を批判する声があがり、民衆の間でも様々な流言が飛び交った模様である。その代表的なものが秘密の文字についての噂だが、築園後に記された荻原厳雄[7]の調査記録によれば、明治十三年前後には以下のように語られていたようである（写真）。

碑身臺石ヨリ深ク入ル。臺石ハ四方ヨリ碑身ニ寄セ掛ケタルモノナリ。而シテ向テ右ノ方ニ八ノ字、同左ノ方ニ國字アリト。此二字ハ若シ見ル時ハ眼ノ潰ルルトテ村人恐レタリシガ、十三年修造ノ時ニ正シク見タリトゾ。國字ノ体ハ碑文ノ中ニアル國字ノ体ナリシトゾ

石碑の地下に隠された部分に秘密の二字が刻まれており、それを目の当たりにした者は失明すると言われていた。しかし、工事の際に碑を敷地内の別の場所に移そうとして発掘作業を行ったことから、工事にあたった村人が禁忌の文字を見てしまったらしい。向かって右には「八」の字、左には「國」の字があり、後者のほうは碑文中のそれと字体が一致するという。

伊藤東涯が享保年間に『盍簪録』で論じて以降、多胡碑を研究した学者は多々あるが、地下部分の文字に注目した者は荻原厳雄以前にはない。奇妙な事実ではあるものの、近代以前は交通網が未整備でフィールドワークが困難だったのに加え、多胡

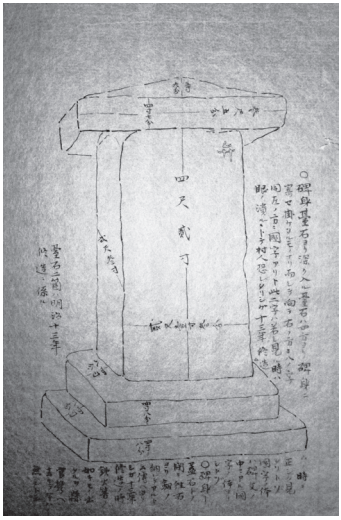

写真１　荻原厳雄の調査記録
『三碑考』より多胡碑全体図

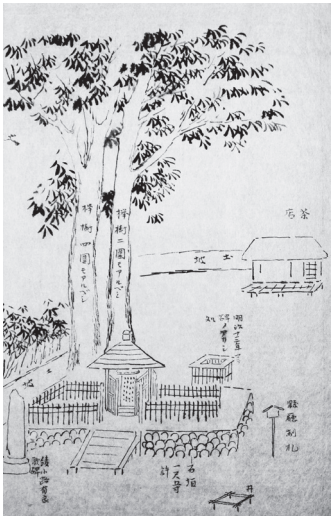

写真２　荻原厳雄の調査記録
『三碑考』より多胡碑境内地景観

碑が地元では鎮守神として祀られていたことから、外部の人間は自由に研究できなかったのだと思われる。

殊に、安永四（一七七五）年頃[8]、改めて普請を行なって多胡碑の敷地を神社風に整備したので、発掘調査の実施は以降きわめて難しくなった。そのせいで近代以前には、多胡碑の研究資料は比較的容易に利用できる拓本類に限られたのである。碑文内容の歴史的検討や字体の比較研究など、石面の情報だけが研究対象となり、石碑全体の考察は後回しとなったのだった。

しかし、多胡碑地下の埋蔵物については近世後期の段階から奇妙な風説がいくつかあった。なかでも松浦静山が『甲子夜話』で紹介しているものは興味深い内容であり、「或人」が唱えたとされる羊太夫キリスト教徒説が紹介されている。

十字架[9]と石槨が多胡碑（羊太夫の墓）境内地から発掘され、なかから「JNRI」なる文字を刻む銅板が出てきた[10]。これはいずれもキリスト教にかかわるものである。そのため代官は南蛮人に問い合わせて調査したが、結局はっきりしたことは分からず終わった。しかし静山の周囲には奇説を唱える文人がおり、発掘物はおそらく中国由来の景教（ネストリウス派キリスト教）の遺物であり、羊太夫は遣唐使時代に信者になったのではないかと主張していたという。

真偽のほどはわからないが、こうした風聞が飛び交っていた事実は、羊太夫伝説の地域や階層を超えた広がりを伺わせる。静山は松浦党の伝統を継ぐ九州の大名であり、時代的な理由もあって南蛮の事物に深い関心を持っていた。「或人」が実際は誰なのかはっきりしないとしても、上流階級の間で、羊太夫伝説がこうした世間話として語られたのは興味深い。近世文化の円熟を示す出来事であり、珍しい文物の噂は無聊をかこつ文人の慰みとなるのである。しかし、反逆者の羊太夫がキリシタンと結びつけられるのは、両者が共に危険な存在として恐れられていたせいであろう。「或人」は必ずしも羊太夫をキリシタンの悪魔とは見なしていないが、『小幡羊太夫縁起』などに登場する羊太夫は、やはり一種の妖術師なのであり、人々からは異形的存在として好奇の眼差しを注がれるのである。

さて、以上のような噂は、明治期に語られた秘密の文字の伝説とどのような関係にあるのだろうか。双方とも話題は地下埋蔵物のことで通じる部分もあるが、口頭伝承としての性格はおよそ対蹠的である。前者が世間話として広く消費されるのに対し、後者は主に多胡碑周辺の村人だけが語り継いできた。関係者にしか知られない秘密なのである。

とはいえ、いかにも怪しげな十字架のことと同様、文字についてもその実在を確認するのは難しい。多胡碑は昭和二十一年の再建工事の際、接地部分がコンクリートで固められた。碑身下部を調査するにはそれを物理的に剥がさなくてはならないが、現在の技術では、文化財を傷つけず作業するのは容易ではないとされる。

群馬県では昭和二十年の敗戦の直後、文部省の指示で文化財

を秘匿する様々な工事が行われた。多胡碑の場合は保存責任者である吉井町が現在地より六〇メートル離れた畑に埋めて隠し、翌年になって敗戦の混乱が一段落つくとそこから掘り出して再建した[11]。このとき応急修理として二段の台石をコンクリートで作ったが、工事担当者はそれを何らかの事情で碑に固定してしまったため、以降は石碑下部の調査ができなくなったのである。

しかし地元の池村には、この戦後の工事のさい碑身下部を見たと主張する人々がいる。尾崎喜左雄の聞き書きによれば「脚部にあたる部分は角錐形で先端は平に切りおとされており、その銘文の所在の向きの面には『國』の字が一字刻してあった」との証言があるというが[12]、「國」の文字については確かに明治の荻原厳雄の記録とも一致している。また、前沢和之も工事に直接関わった人物の言葉を紹介して「コンクリートに隠れた碑身の下部は先端を切り落とした角錐形につくられていて、その南面中央には『国』の一文字がきざまれているのをみた」と述べている[13]。このように、「國」の文字の所在については複数名の証言があることから、信憑性の高い情報とみなして良いかもしれない。

ところがいっぽう、荻原の記録にあるもうひとつの「八」の文字については、必ずしもはっきりせず、「文字は『羊』だった[14]」との証言もある。両文字は最初の二画が共通しており、どちらかの話者が見間違えた可能性もあるが、現段階で結論を出すのは差し控えたい。ただ後述するように、「八」も「羊」も、かつて多胡郡周辺で信仰されていた神々の名前の一部である。それだけに、何らかの共同幻想が文字を幻視させたこともありうる。

(2)「八」「國」「羊」の意味するもの

羊太夫像の歴史的形成については、これまで群馬八郎伝説との関係において理解されることが多かった。この伝説の記録として古いものは『神道集』所収の「上野國那波八郎大明神事（本論文では八郎大明神事と略す。以下同じ）」だが、両物語は在地豪族である小幡氏の由来を説くことにおいて共通している。語り手の自尊感情とルーツへの拘りを読み取れる作品である。

上野国を治める群馬八郎はすぐれた人物だったが、兄弟からの嫉妬で殺害されてしまう。しかし蛇体となって甦り復讐を果たすと、今度は国中から生贄を取るなど人々に害をなすようになる。甘楽郡を治める尾幡権頭[15]も娘を差し出すことになるが、彼女に恋焦がれる青年貴族の宗光が身代わりを申し出る。ところが死の運命に動じない宗光が贄棚の前で一心に法華経を読誦すると、蛇体の八郎にもその心が通じ、にわかに改心して上野国を守る神となる。

この功績により上野国司に任命された宗光は上野国に土着し、尾幡家の人々と幸せな日々を送る。尾幡権頭は目代としてよく彼を補佐し、人民の支配を任される。そして「国為父、人民為母、大蛇為知識」として人々から崇敬された宗光は、やがて多

胡郡鎮守辛科大明神として祀られるようになる。

ここで由来を説かれる辛科大明神については、その祭神を「羊」だと比定する説が、文人の間では近世後期から存在するが、[16] 本縁起に羊太夫は登場しない。しかし同じく多胡郡を舞台とする『小幡羊太夫縁起』では後の小幡氏らしき集団のルーツが説かれており、羊太夫討伐の恩賞として「武蔵上野信濃三箇國を永代給ワるとのあんとの御判被下難有三度頂戴有関東へ下り小幡乃谷ニ御所を建富貴にさかへ給也」[17] などと述べられる。「官軍」の大将が羊太夫の欠地を賜り、再び小幡氏として繁栄したというのである。[18]

さて、多くの研究者はこうした小幡氏をめぐる一連の物語の意味を地方史的な知識に基づいて理解し、当該地域（多胡郡、甘楽郡）特有の「渡来人の文化」との関係性によって説明してきた。[19] そして、物語の担い手として羊＋太夫なる芸能的宗教者集団の存在を仮定する説や、[20] 金工技術者集団のような職能民の存在を仮定する説が出されている。[21] 先行研究においては、語りの内容を何らかの歴史的事実に結びつけようとする傾向が強かったのである。

しかし、果たして当該地域には、そうした注目すべき特殊な社会集団が存在したのだろうか。たしかに、上野国にある十四の郡のうち、なぜか多胡郡だけに古代の建郡碑（多胡碑）が残り、地域の文化財として大切に保護されてきたのは事実である。こうしたことは、当該地域の人々の強い自意識の表れにちがいない。じっさい、この石碑は多胡郡を治めた羊太夫の墓と長らく信じられてきたうえ、碑石の形態からは渡来文化の影響が濃く伺える。また、『八郎大明神事』もまた、同じ多胡郡の鎮守とされる辛科大明神の由来を説くにあたり、神に祀られた英雄を「國の父」「人民の母」「知識（宗教指導者）」などと讃仰するのである。

かつての多胡郡には、渡来人が作った何か特殊な共同体（國）があり、そこには偉大な指導者（國の父）がいて、彼に従う人々（人民）を善く導いていたのかもしれない。[22] 現代の歴史的常識には反するが、『神道集』が編纂された時代の多胡郡には、そうした神話を信じる人々がいたのだろうか。

しかし、当該地域において渡来文化の存在が「再発見」されたのはようやく近世後期以降になってからだ。ゆえに彼らの先祖が実際に渡来人であったとしても、少なくともこれらの物語が作られた時点においては、民族問題は未だ人々の意識の射程には上らなかったろう。中世の「八郎大明神事」も、近世につくられた『小幡羊太夫縁起』も、人民を指導した人物が大陸の人間だったとは述べない。したがって、地域の人々が多胡碑を篤く尊崇してきた事実については、古代の渡来人の問題とはまったく別に理解する必要がある。

ともあれ、タブー視されてきた地下の文字が「國」「羊」「八」とされる以上、やはりこの地域独自の中世神話との関係を無視することはできない。「國」は宗光を表す「國の父」、「八」は

「群馬八郎」、「羊」は「羊太夫」に通じる。それぞれが地域共同体におけるもっとも重要な神格を示しており、それゆえに多胡碑が人々から畏怖されたと考えられる。

またとりわけ注意すべきは、「國」があくまでも日本国の「國」でなく、民衆が支持する「上野國」の「國」であろうことだ。小幡氏を尊崇する近代以前の農民のなかには、「当国天引城ニ小幡羊太夫宗勝と申国主御座候」などとし、由来書などの中で、羊太夫を「國主」だと述べた例がある。[23] 古代日本に羊太夫の「國」があったとは思えないが、民衆の間でそれが擬制されていたのは事実だ。

3、風説が広まる社会的環境

(1)土着的宗教勢力の衰退と抵抗

秘密の文字の噂が流れた明治時代初期は、群馬県の宗教界で次々と改革が行われた時期である。しかしその改革の効果は地域の宗教的権威に対してしばしばマイナスに働いていた。例えば上野国の宗教文化の中心地のひとつである一宮抜鉾神社（貫前神社）においても、官社制度の採用により小幡氏を頂点とする旧来の体制が覆されている。

よく知られるように、近世までの抜鉾大明神は小幡氏（一宮家）の子孫を「大宮司」に載いてきたが、明治四年に国幣中社になったことからこの制度は否定され、代わって中央から派遣された神職が神主を務めるようになったのである。もっとも、当時の「大宮司」は十代の少年である一宮神（新）太郎であったので、明治維新の難局に自ら対応するのは難しかったろう。

ただ、小幡氏に好意的な宗教者たちもまだ地域から一掃されたわけではなかった。明治十年、成人となっていた神太郎は改めて貫前神社の「主典」に採用されるが、興味深いことに翌十一年になると、新居守村が七十歳代の高齢ながら同じ「主典」に任命され彼を支えるようになる。

この守村は小幡家と親しい関係にあった人物で、欧化に反対したことで知られる上野国の国学者である。諧謔を好む奇人として名高いが、当時はその家柄と学識により保守的な人々から慕われていた。遠祖が小幡氏の家臣だったことを誇りにする守村は、若い神太郎にもきわめて好意的だったようである。そのためと思われるが、守村を宮司にする案もあったらしい。しかし、与えられた「主典」の地位はこの二人にとって満足できるものではなかったようで、神太郎が明治十四年三月に辞職したのに続き、守村も同年十月に貫前神社を去っている。

辞職の詳しい理由については分からないものの、背後に近代化をすすめる人々との対立があるのは間違いない。じじつ彼は、明治十一年の冬ころ多胡碑のことで県令を激しく非難し、歌まで作って揶揄したことが知られる。これは当然世間に広まり、県令の耳にも入って大いに辟易させた。

早くよりあやしまるる事どもおほかりけれは馬庭村樋口氏に問ひたるにひそかに埋てありけるよしをもらしけれは

いつの世にかきもうつみて後のよにほりいてつへくことはかりたはかりおける古塚の中より出て古塚の中にありきと今はしも知る人をなみあなふるしあなめてたしといひはやしめてはやされていつはりもまことにみゆる多胡のいしふみ

『新居守村翁遺著』[25]

以上の歌は解釈が難しいが、史跡保護行政への痛烈な皮肉であろう。公園まで造ろうとする県令や、それに追従して「あなふるし」「あなめでたし」と多胡碑を褒めそやす人々を嘲っているのである。

なお県令は講演建設を祝って「深草のうちに埋れし石文の世にめつらるる時はきにけり」という歌をよんでいるが[26]、守村の考えは真逆だった。公園など作ったところで、多胡碑の本質はまだ「古塚の中」に埋もれたままだと当て擦るのである。

しかし、守村が樋口氏に問い合わせて知ろうとした「早くよりあやしまるる事」とは何を言うのか、また何が「ひそかに埋てある」のかは分からない。

ちなみにこの樋口氏とは馬庭念流宗家の樋口定広のことと考えられるが、一時期は神主も務めており文武両道の人物として知られていた。守村が多胡碑のことを樋口に尋ねたのは、その道場がある馬庭村が池村と同じく旗本長崎家の領地だったことに加え、彼が多くの門弟をもつ「先生」として人々から慕われていたからだろう。

また定広が自身でまとめた「本国信濃　樋口家系」という資料によれば、彼の先祖にあたる樋口定勝の娘が下池村の白倉次左衛門のもとに嫁いでいるようである。白倉は多胡碑を預かる家が代々名乗る苗字であり、当主は「吾が家は白倉城主の後裔にして白倉城没落後、池村に来り代々多胡碑の監視をなせし豪族である」と主張していた[27]。白倉城主だとすればやはり小幡氏の一族である。しかしその先祖は修験者でもあり、公園建設が始まるまでは多胡碑の隣で起居していたのである。

以上のことから考えると、樋口氏が知り得た多胡碑の情報は、おそらくこの白倉家周辺が発信源だったと考えられる。しかし守村が直接白倉家に尋ねなかったのはなぜだろうか。何か特別の事情があったのかもしれない。多胡碑園の用地買収の記録を見ると「明治十一年池村白倉甚五郎所有地ヲ醵金之内ヲ以テ買受[28]」とある。しかしこの甚五郎は翌明治十二年六月には亡くなっているので[29]、当時かなり高齢であったか、あるいは病が重かったのではないか。公園建設と時を同じくして甚五郎がこの世を去ったことも見逃せない。

(2)隠されたものの意味と効果

新居守村、樋口定広、白倉甚五郎の三名はいずれも先祖が武士であり、歴史的経緯もあって深い地縁血縁で結ばれていた。

殊に白倉と新居については小幡氏の関係者であることが注目される。彼らは小幡氏が社会的影響力を失いつつあることに不満を持っていたはずであり、近代主義者たちに密かな憤りを抱いていたと考えられる。

彼らの周囲にいた多くの人々も、それについてはほぼ同様ではなかったか。明治十一年に守村が「古塚の中にあり」などと述べて県令の多胡碑保護政策を揶揄したことと、明治十三年になって地下の文字が突如「発見」されたことの間にはおそらく深い因果関係があるだろう。

先に触れた荻原厳雄の調査記録に、秘密の文字のことと併せて県官の不祥事が記録されているのもその傍証となる。

碑身ト蓋石トノ間ニ往古ヨリ剣ノ納レテアルト云伝ヘタリシガ、十三年修造ノ時、鉄火箸ノ如キモノ出タルヲ県官携ヘ去リテ今ハ無シト云

多胡碑の笠石と碑身との間に剣が隠されているとの伝承があったが、じっさいに調べてみると鉄火箸のようなものが出てきただけだった。しかしそれは県の役人が持ち去り、未だ返却されないというのである。

もし本当に剣があったとすれば、呪術的性格のものと思われるが、他の史料には全く見えない奇妙な情報である。しかも役人が持ち去ったというのがますます不審だ。事実無根の噂ではないだろうか。しかし、禁忌とされた文字や「ひそかに埋てあるもの」の伝承などと関係付けて考えれば、一連の語りに込められた人々の思いは明らかだろう。彼らは多胡碑園の建築に反対であるうえ、県の役人のことも侵略者（官軍）として憎んでいるのだ。

しかし、果たして権力とはそれほどまでに敵対的なものだろうか。たしかに明治十三年、昭和二十年と、政治的変化に伴い多胡碑は時代の激流に呑み込まれた。ただその度に不気味な噂が生まれるのは、必ずしも政府や米軍のせいではない。むしろ問題は、そうした権力に過剰な恐れを抱き続けてきた、地方民衆の卑屈な精神のほうにあるのではないか。

地下の恐ろしいものなど、実際にはなにひとつ存在しないかもしれない。「ひそかに埋てあるもの」も、羊太夫の呪いも、不遜な人間たちを追い払うための方便だった可能性すらある。

じじつ小幡氏に関しては奇怪な逸話が多く存在するが、近世の記録に伝わるものは特に誇張ばかりで不審な内容が目立つ。例えば一宮の「大宮司」は、「羊十四代の孫茂常」の子孫だと言われ、[30] 羊太夫のことを記した「ふるきふみ」を所持すると考えられていた。[31] ところが、当時そうした文書は披見が許されず、明治維新以降は実際に存在したのかさえ分からなくなっている。しかも現在確認できる小幡氏の系図のうち古いものは冒頭の部分が破損しており、茂常以前の人名が読み取れないのである。

このように小幡氏の権威の根源については長きにわたり真相

究明が待たれてきたが、その実体はおよそ謎に包まれている。小幡氏を名乗る宗教者集団がなぜ生まれ、そしてどのように発展してきたのかが分からない。

小幡氏は羊太夫伝説について沈黙を守ってきた。彼らはこれまでこの伝説の英雄との関係を強く主張したこともなかったし、また無関係だと断言したこともなかった。たしかに民衆は様々な伝説を語ってきたが、小幡氏はいつもそれを放置し、一連のお話が世間に広まるままにしていたのである。[32] また羊太夫伝説に興味を抱く人々も、畏敬すべき相手にはあえて説明責任を求めなかった。

前近代の社会においては、こうした沈黙が宗教的権威をいっそう荘厳化したようだ。権威は自身が格好の噂の的だからといって、特別に言辞を弄してまで自己の正統性を主張することはないのである。

しかし今後行われる調査により、彼らが守ってきた多胡碑に「國」「八」「羊」の文字が実際に刻まれているかどうかが確認され、それらが上野國の神々の名であると結論付けられれば、ついにその宗教的権威の実体が明らかになる日が来るかもしれない。

おわりに

本論文では、文書や調査記録など、近年発見された貴重な資料をもとにして羊太夫伝説に新たな光をあてた。多胡碑の碑身下部に刻まれているという「國」「八」「羊」といった秘密の文字の伝説に注目し、人々の恐怖心が奇怪な言説をどのように作り出すか論じた。

羊太夫伝説の世界においては、暴力的な権力への恐怖と、土着神の異形性への畏怖とがないまぜになっている。特に近代国家と宗教勢力との軋轢が顕在化した明治期になると、その対立が伝承世界にネガティブな影響を与え、語りの内容が次第に先鋭化するに至る。多胡碑を国有化し、公園建設を始めた近代主義者たちを牽制しようと、神罰や呪いなどの要素が前景化される反面、羊太夫の存在自体が次第にいかがわしいものと見なされてゆくのである。

知識階級が碑文の書体や書かれた内容に注目したのに対し、在地の人々が地下の秘された文字の存在に拘泥したのは、明らかに近代的な文書主義への反動であることは言を俟たない。近代主義者にはとても理解できない世界があるという主張なのだ。

また一部の土着の宗教者たちは、宗教的タブーを匂わせつつ、多胡碑を占有する近代国家の権力者たちを皮肉や諧謔で批判した。その表現は晦渋に過ぎて一般人には真意が伝わらなかったが、素朴な信仰心を持つ人々は大いに動揺したのである。

こうして、国家から無視された宗教者たちの不満や、指導者を失った民衆の不安などが、近現代の羊太夫像に不気味な暗い影を落としたのであった。[33]

注

（1）写本にはそれぞれ『天羊記』『小幡羊太輔縁起』『羊太夫縁起』などの表題がつけられているが、本論文では『小幡羊太夫縁起』に統一した。

（2）佐藤喜久一郎　二〇一二「多胡碑と渡来人のフェイクロアー郷土史をめぐる文化政治学ー」由谷裕哉編著『郷土最考ー新たな郷土研究を目指してー』角川学芸出版

（3）『小幡羊太夫縁起』において「官軍」という言葉が初めて使われる。「赤城大明神事」では「諸國ノ軍兵」とされるが、帝の宣旨によって集められた軍勢である。

（4）「下池村碑文存念書」馬庭念流樋口家文書　文政六（一八二三）年

（5）多胡碑の文が不完全で欠落した部分があるとの説は、早くは青木昆陽が唱えている。しかし近年の陰謀論者やディレッタントはそこから一歩進み、羊太夫の存在を消し去るため支配者が工作したと主張するようになった。それについては機会を改めて論じたい。

（6）内山正如一九二一『多胡碑と堀越家の関係』私家版

（7）高崎市立図書館所蔵　荻原嚴雄『三碑考』に依る。荻原嚴雄は高須藩出身の国学者で、考古学の草創期である幕末から明治初期に活躍した。貴重な研究記録を多く残したが、そのほとんどは戦災で失われたり、散逸したりしている。

（8）沢田東江などの研究で多胡碑の書道史的価値が再発見され、十八世紀中期には見学者がにわかに増大した。それを意識して神社建設工事を行ったのであろう。

（9）松浦静山「多胡碑十字架の事」『甲子夜話』63巻21

（10）同「多胡碑の傍より掘出す蛮文并考」『甲子夜話続編』73巻17

（11）松田猛二〇一〇「多胡碑の温存と終戦直後の文化財保護行政」『近藤義雄先生卒寿記念論集』群馬県文化事業振興会

（12）尾崎喜左雄一九八〇（原論文は一九六三）「多胡碑の研究」『上野三碑の研究』尾崎先生著書刊行会　21頁。吉井町大字池字御門在住の横田公雄からの聞き書き。

（13）前沢和之二〇〇八『古代東国の石碑』山川出版社55～57頁

（14）同上

（15）現在は一般的に小幡氏と表記するが、『神道集』では尾幡氏とする。

（16）地誌の『多胡砂子』の説である。『多胡砂子』一九六七（元資料は十八世紀後期）『群馬県史料集』2　群馬県文化事業振興会

（17）『天羊記』（享保十四（一七二九）年写本）より引用。『富岡市史』一九九一　近世通史編・宗教編711頁

（18）一郡を治める領主を滅ぼして、その恩賞が「武蔵上野信濃」では過大だが、この三ヶ国を一体とみなす点は「那波八郎大明神事」も同様なので指摘しておきたい。後者の縁起では、事件が解決して大団円をむかえる最後の部分に、上野国司になった宗光の娘たちふたりがそれぞれ武蔵と信濃の国司に嫁いだとの記述がある。これは両物語の世界観の一致を示すも

のであり、小幡氏の伝説がどのような圏域で語られていたかがわかるのである。

(19) 有川美亀夫一九七三「神道集甘楽郡の説話」『群馬大学教育学部紀要』22　徳田和夫　一九八四「神道集『那波八郎大明神事』の形質―附・辛科神社蔵『辛科大明神御縁起』の紹介と翻刻―」『国語国文学論集』13

(20) 堀口育男　一九八六「羊太夫説話伝承考」『伝承文学研究』32

(21) 徳田 前掲論文

(22) しかしこの小幡氏の共同体は幻想であり、いわゆる「小盆地宇宙」のように、現実的諸条件によって具体的に定義され得るものではない。

(23) 茂原照作　一九七五「小幡氏家臣斉藤充司家に残る『古来之聞書』」群馬文化 165

(24) 一宮神太郎と新居守村については、神道登一九九一『群馬の国学者　新居守村考』群馬出版センターを参考にした。

(25) 『新居守村翁遺著』国会図書館蔵

(26) 多胡碑境内には現在この歌を刻んだ楫取素彦の歌碑が立つ。

(27) 山田有鄰一九三八『山田氏系譜　並白倉氏興亡史』私家版 326～328頁

(28) 高崎市吉井町「丸文」堀越家文書

(29) 山田　前掲書　326～328頁

(30) 毛呂権蔵　一九七四（原史料は一七七四）『上野國志』　関東史料研究会　298～299頁

(31) 奈佐勝皐一九七一（原史料は一七八六）『山吹日記』『群馬県史料集』6 群馬県文化事業振興会

(32) 貫前神社の大宮司は幕府に対して由緒を主張したり、国学者に依頼して自家の由来を研究させたりしている。その成果は伴信友の『上野国三碑考』に結実する。しかしそれは、権威の危機を示すきわめて例外的な事態であった。

(33) 現代の羊太夫信仰については、佐藤喜久一郎　二〇一七「多胡碑の模刻と羊太夫の墓誌―記念物とフォークロア」由谷裕哉編『郷土の記憶・モニュメント』岩田書院　参照

（さとう・きくいちろう／育英短期大学）